

ティーチング・ポートフォリオ

2016



Winchester Cathedral, UK

第14回佐賀大学・第3回福岡工業大学
ティーチング・ポートフォリオ・作成ワークショップ
2016年3月4日(金)～6日(日)
於 FIT セミナーハウス (由布院)

佐賀大学

所属 全学教育機構

氏名 江口 誠

makotoe@cc.saga-u.ac.jp

目次

1. 教育の責任	1
2. 教育の理念と目的	1
3. 教育の方法	2
3-1. 「大量のインプットにより、学生の総合的な英語力を向上させる」	3
3-2. 「英語学習の習慣化を図り、自律した学習者を養成する」	4
3-3. 「様々な価値観や文化の存在を認識させ、それらに対する自分自身の意見を（英語で）表現出来る人材を育成する」	4
4. 教育を改善するための努力	6
4-1. 最新の教育理論・授業実践の修得	6
4-2. 授業アンケートの活用	6
4-3. 教育実践の振り返りと論文の執筆	6
5. 教育の成果・評価	7
5-1. 授業時間外学習時間について	7
5-2. eラーニング、学習の習慣化について	8
5-3. 意見を発表する機会について	9
6. 今後の目標	9
6-1. 語学としての英語の授業に関して：「英語A」、「英語B」、「英語C」、「英語D」	9
6-2. イギリス文学・文化の授業に関して：「欧米の文化・文学」、「異文化理解演習Ⅰ」 （2016年度以降）、「英米文学演習Ⅱ」（2018年度以降）	10
7. 添付資料・参考資料	11
添付資料1	12
添付資料2	17
添付資料3	18
添付資料4	19
添付資料5	20
添付資料6-1	21
添付資料6-2	22
添付資料6-3	23

1. 教育の責任

現在私が所属する佐賀大学全学教育機構は、全ての学生の教養教育を担っており、私個人としては本庄キャンパスにおける語学としての英語（共通基礎科目）の授業及び欧米の文学や文化に関する授業（基本教養科目）を担当している。因みに 2016 年度以降は、それらに加えて教育学部開講の異文化理解や英米文学など、教員免許状の教科に関する科目も担当する予定である。

共通基礎科目については、新入学生が最初に受講する「英語 A」、TOEIC IP スコアによって習熟度別クラス編成となる「英語 B」、「英語 C」及び「英語 D」に加え、それぞれの授業科目の再履修クラスも担当する。特に 2 学年後学期に学生が履修する「英語 D」については、授業評価の 30% を TOEIC IP スコアが占めるため、理想的には 2 学年次終了までに（満点の 30 点が付与される）505 点以上のスコアが取得出来るような英語教育を施すことが求められている。

基本教養科目については、「文化の分野」に属する講義科目「欧米の文化・文学」を担当している。受講学生にはイギリス文化や文学作品を通じて、異文化理解を促し、その必要性を認識してもらうような授業を行う必要がある。アメリカの提携大学の授業に参加して、短期集中的に英語力を高めるイマージョン（集中訓練）プログラム「文化特別」も他の教員と担当しており、事前研修では現地の正規授業にスムーズに参加出来るように、学生の英語力を高めておくことが求められる。

佐賀大学赴任以降の担当授業を以下にまとめる。（詳細については添付資料 1 を参照のこと）

科目名	対象学年	種別・特徴・期間	開講年度	受講者数
英語 A	学部 1 年生	選択・教養・半期	2014～2015 年度	39～58
英語 B	学部 1 年生	選択・教養・半期	2014～2015 年度	38～43
英語 C	学部 2 年生	選択・教養・半期	2014～2015 年度	22～42
英語 D	学部 2 年生	選択・教養・半期	2014～2015 年度	30～43
欧米の文化・文学	学部全学年	選択・教養・半期	2014～2015 年度	57～85
文化特別 (Immersion Program in America)	学部全学年	選択・教養・集中	2014～2015 年度	6～10

2. 教育の理念と目的

私自身の専門はイギリス文化・文学である。その中でも特にイギリス・ロマン派と呼ばれる詩人の文学作品や 19 世紀初頭イギリスの文化研究を行っている。私の教育の理念の大きな支えとなっているものは、程度の差はあれ、そこから派生する「英語の理解や異文化的体験の楽しさ」を学生にも同じように実感してもらいたいという点に尽きる。「教育の責任」で述べたように、私は語学としての英語の授業と文化・文学に関する授業の 2 種類の授業を担当しているが、共通して言えることは、学生が英語（文化の授業では英語と日本語）を使って社会の多様な価値観や文化と触れ合うことで、国際的な視野を広げ、さらには異文化間コミュニケーションを円滑に行う手助けをしたいと願っている点である。教材として扱う英語の難易度にかかわらず、英語という道具を通じて異文化に触れ、それを理解する楽しさを感じてもらえるのではないかと考えているからである。

直接的な文化体験としては、もし可能であれば短期・長期にかかわらず、学生には海外の大学に留学することを促している。私自身、大学4学年次にアメリカの大学に1年間留学した経験があるが、年齢が比較的低い時に異文化体験をすることで、往々にして価値観や世界観が変わるものである。そのためには異文化理解と語学力の修得が必要となる。さらに、例えば留学先が英語圏であれば、留学に必要なTOEFLやIELTSのスコアなどの具体的な短期目標が定まり、必然的にやるべき事が数値目標として具体化されるという利点も生じる。

その一方で、グローバル化された現代社会においては、英語が話せず、日本的な価値観や考え方に固執している人材は生き残っていくことがますます困難になりつつあるという現実にも目を向けなければならない。政府のグローバル戦略の一環として2020年までに留学生30万人の受け入れを目指す「留学生30万人計画」によって、英語と日本語は当然ながら、その他の複数の言語を流暢に使いこなす優秀な留学生が日本の大学に入学し、その後は日本企業に就職しているという厳然たる現実があり、さらにその傾向は年々強まっている。つまり、日本人学生はそのような人材と職を求めて競い合わなければならない。また、日本の大学の国際的競争力の向上を目指す「スーパーグローバル大学創生支援」に見られるように、優れた取り組みを行っている一部の大学に於いては徹底した国際化を実行しており、グローバル化への取り組みや対応が遅れている大学との格差が顕著になってきている。

そのような状況下において、学生は大学教育の過程で可能な限り将来のキャリアの選択肢を広げておくことが肝要であると思われる。もし仮にグローバル社会の第一線で活躍することを目的としないようなローカル志向の学生であったとしても、将来世界中の国々の人々と英語で意思疎通する機会が訪れる可能性がないとは言い切れない。さらには、将来のキャリアとは関係なく、外国人との英語によるコミュニケーションを取ることが容易になり、QOLという意味において、自身の人生をより楽しく、有意義で充実したものにしてくれるはずである。しかしながら、そのためには世の中に存在する多様な価値観や考えの存在を知り、その差異と共通性を認識し、かつそれらに対して寛容であり、さらには外国人と英語で意思疎通出来る程度のコミュニケーション能力が求められる。従って、英語教育に限って言えば、学生の英語力を高めるために、授業に対するコミットメントを高めてもらう必要があると考える。

3. 教育の方法

教育の理念で掲げた、「学生が英語（もしくは日本語）で社会の多様な価値観や文化と触れ合うことで、国際的な視野を広げ、さらには異文化間コミュニケーションを円滑に行う手助けをする」ために私が最も大切だと思っている点は、学生が主体的に学習に取り組む姿勢を促すことである。しかしながら、英語学習を自ら進んで楽しく行うような、いわゆる内発的な動機付けによる自律的な学習に至るまでには、賞罰や評価を前提とした外発的な動機付けも必要である。従って、まず手始めに、授業評価の一部として学生の取り組みや成果を評価しなければならない。具体的な方策は以下の通りである。

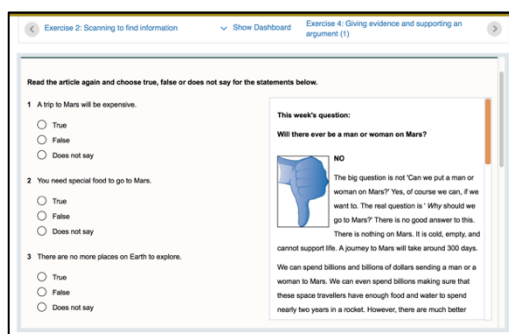
3-1. 「大量のインプットにより、学生の総合的な英語力を向上させる」

語学としての英語という視点から、まず学生に不足しているのは英語のインプットの量であると考えられる。つまり、英語の授業で触れるリスニングやリーディングの絶対的な量が明らかに不足しているのである。にもかかわらず、例えば本学で提供されている教養教育としての英語の授業は半期1単位・合計4単位に過ぎず、週1回90分の授業だけで学生の英語力を向上させることは極めて困難である。そのため、課外学習としてeラーニング等を活用して、可能な限り多くの英語に触れて欲しいと考えている。それによって、話されていることもしくは書かれている内容の概要を素早く理解する訓練（スキミング及びスキミング）を行いたい。

また、現代はイギリス人やアメリカ人が話すような英語ではなく、「World Englishes」と呼ばれる多種多様な地域や形態の英語を認める傾向が益々強くなってきており、実際、世界中の人々が同じような英語を話すようなことはあり得ない。TOEICテストにも2006年以降は、オーストラリアの英語などの発音のバラエティが盛り込まれていることから分かるように、多様な英語の受容は必然の流れとなっている。しかしながら、日本の中学校や高校では、依然としてアメリカ英語の発音や綴りを基礎とした語学教材が多く使われ、学生が多様な英語に触れる経験が不足していると思われる。従って私の授業では、英語のインプットの量と同時に、様々なアクセントで話される英語にも慣れ親しんで欲しいと考えている（使用教材例については添付資料2を参照のこと）。

具体的に、まず大前提として私が行う授業では全て英語で書かれたテキストを採用することになっている。さらに比較的習熟度が高いクラスにおいては、可能な限り指示や説明を英語で行うようにしている。これらはいずれも「英語の授業では英語で考え学ぶ」という姿勢で授業に取り組む雰囲気を作り、多少なりとも英語に触れる機会を多く作るためである。実際、現行の高等学校学習指導要領にも「授業は英語で行うことを基本とすること」と明記されており、入学した学生は多少なりとも英語で授業を受ける準備が出来ているはずである。

また、テキストで扱う英語の量は非常に限られている。インプットの量の不足を補うために、私は原則としてeラーニングを活用することになっている。近年はeラーニング教材を備えたテキストが多く使われるようになってきており、可能な限りそのようなテキストを採用することになっている。また、eラーニング教材を備えていないテキストを採用した場合でも、Moodleを活用して授業内容に準拠した課題を教員自ら作成することになっている。eラーニング学習によって、学生はインターネット環境がある場所であればどこでも学習でき、期限内であればいつでも学習することが可能となるという利点がある。また、学習するコンテンツによっては、スマホやタブレットに代表される情報携帯端末によるユビキタス学習も可能となっており、英語学習のハードルが下がるという利点もある。

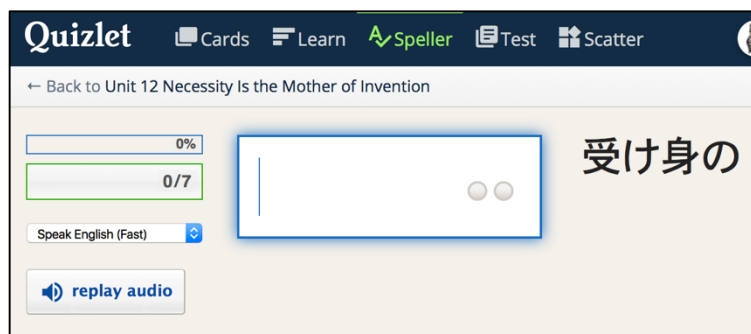


eラーニング学習画面の例

3-2. 「英語学習の習慣化を図り、自律した学習者を養成する」

特に英語力が低い学習者に顕著な特徴として、英語を学習する習慣が身につけていないことが挙げられる。さらには英語の学習方法が分からないという学生も少なからず存在する。そこで、私はeラーニングを活用したリスニング問題、クローズテスト、語彙問題、もしくはライティングの課題を出したりするなどして、英語学習を習慣化することを目指している。その際は、例えばゲーム感覚で語彙学習が可能な「Quizlet」を採用したり、ゲーム要素がコンテンツに盛り込まれたeラーニング教材を採用したりするなど、学生が楽しく英語学習が出来るように配慮している。まずは語彙学習に対する抵抗感を緩和させ、その他の様々な英語学習に触れることによって、最終的には自分に合った英語の学習方法を見つけ出し、自ら目標を立ててそれを達成するための学習ストラテジーを構築することが出来る、いわゆる自律的な学習者となって欲しいと願っている。

具体的に自律した学習者を養成する手助けとして、語学の授業では上記のeラーニング学習も含め、毎回何かしらの課題を出すようにしている。それは学習する語彙の予習・復習、リスニング問題や英作文等様々である。つまり、「英語の授業に臨むためには必ず課題をやっておかなければならない」ということを常に学生に意識させることが目的である。逆に言えば、毎回指定された期限付きの課題が提出できない場合、その学生は私の授業の単位を取得することは極めて困難となる。それは私に与えられた教育の責任、つまり語学の授業では「学生の英語力を高める」ことが難しくなるからである。



Quizlet による語彙学習の例

3-3. 「様々な価値観や文化の存在を認識させ、それらに対する自分自身の意見を（英語で）表現出来る人材を育成する」

英語教育においては、大量のインプットだけではなく、適切なアウトプットも必要である。それによって、理想的には修得した知識を定着する手助けとなるからである。そこで、毎回異なるテーマで出来るだけ学生が自分の意見を表現するようなタスクを取り入れ、発音の間違いや文法の誤りなどの些細な点を気にすることなく、修得した語彙や文法形式を活用した発表が出来るような機会を設けている。そのテーマは、正答がないものや解釈が分かれるもの、価値観によって回答が異なるものなどを意図的に選択している。そして、「なぜそう思うのか」という点を常に明かにするように学生に指導している。

具体的には、語学の授業では、まず口慣らしとして授業開始時にシャドーイングを導入している。シャドーイングとは、イヤホンなどで音声を聞きながら、まるで「影」のようにその内容を順次声に出して復唱していく作業である。発話内容が予め決められているため、アウトプットのレベルと

してはさほど高くはないが、英語を話す準備や英語を学習する雰囲気作りとしては最適であると考え、復習の一環として授業に取り入れている。その際、ピア・レビュー方式でお互いに達成度をチェックさせるようにして、話す側と聞き取る側の双方が取り組めるように工夫している。また、毎回の結果は簡単な感想とともに記録用シートに記入させ、グラフ化して振り返りが出来るようにしている（添付資料3）。但し、これはあくまで授業の導入の一部として採用しているため、達成度による授業評価は行わないことにしており、学生にもその旨を明確に伝えている。それによって、学生は間違いを恐れて極度に緊張することなくシャドーイングに気軽に取り組めるからである。

その他、ペアワークや（書く過程を意識させる）プロセスライティング等を適宜取り入れ、学生自身の意見や考えを表現できる機会を設けている。それによって、英語で自分の考えを相手に伝える楽しさを感じてもらい、内発的動機付けとしてさらなる英語学習に繋げてもらいたいと考えているからである。ペアワークでは、例えば雛形となるダイアログに語句を入れ込むタスクに加え、「なぜそう思うのか」や「なぜそれを行っているのか」等の理由を自分の言葉で即興的に説明する箇所を必ず設けることにしており、単にダイアログを読むだけの形式的な会話練習に陥らないように工夫している。

アウトプットの促す方策の一つとして、英作文の課題も出している。但しeラーニングによる英作文の課題については、技術的には可能であってもスマホ等から入力することは極力避けるように指導している。綴りのミスや拙速な解答・提出が散見されるからである。従って、特に英作文に関しては、紙による課題の提出も必要に応じて適宜行っている。（添付資料4）

また、英語や日本語に関わらず、自分の考えを自分の言葉で表現することは極めて重要であると考える。それによって、学生が主体的に授業に参加することが出来るようになるからである。従って、例えば「欧米の文化・文学」の授業では、グループ討論の機会を多く設けて、学生の授業参加を促している。また、グループ討論を土台とした小レポートを課すことで、グループ討論へのコミットメントを促し、さらには討論で意見が言えない学生でも自らの考えや感想を表現する機会が得られるように配慮している。

シャドーイング相互チェック (Unit 13)

シャドーイングをする学生の氏名 ()

チェックする学生の氏名 ()

※発音出来ないと思われる語に赤で下線を引いて下さい。終了後にその語数をカウントし、達成度 (%) を算出して下さい。ただし、短縮形や数字は1語とカウントして下さい。

Philippe Baton is a French chef who owns two popular restaurants in Tokyo. Le Petit Tonneau—casual bistros offering French food at affordable prices.

Philippe started training as a chef when he was just 16 years old. Within a few years, he worked his way up to the kitchen of one of the best hotels in Paris. In 1986, Philippe spent a year in Kobe. Four years later, he returned to Japan, and decided to make it his home. In 1996, he challenged a famous chef on the TV show, "Rvori no Tetsujin"—and won!

He appears at practically every event in Japan to promote French food and wine. He's published cookbooks in Japanese with easy recipes that anyone can make at home. The French government has honored him for his efforts.

Now Philippe is a leader in the industry. What's his recipe for success?

(145 words)

発音出来なかった語数 () 語

シャドーイング達成度 () %

シャドーイング活動用シートの例

Dialogue:

A: If you had the chance to promote Japanese culture in a foreign country, what would you like to teach?

B: If I had such an opportunity, I'd like to teach...

A: And why would you choose to teach this?

B: I want to teach this because...

A: What's something else you'd like to teach or share about Japanese culture?

B: I'd also like to teach or share...

ダイアログ用シートの例

4. 教育を改善するための努力

学生にとって最適な教育を施すためには、教員は常に授業改善を行う必要があると思われる。私は以下の2つの方策を念頭に於いて授業改善を行っている。

4-1. 最新の教育理論・授業実践の修得

私の専門はイギリス文化・文学ではあるが、語学としての英語を教えるという職責を果たす上で必要となるため、努めて最新の英語教育の理論や教育実践の方法を修得するようにしている。一例として、私はLET(外国語教育メディア学会)に所属しており、毎年の全国大会はもちろんのこと、各支部会にも可能な限り参加し、特にeラーニングに関係する発表やワークショップに参加している。具体的には、2015年度には、LET(外国語教育メディア学会)中部支部大会(2015年5月)、LET九州支部大会(2015年6月)、LET全国大会(2015年8月)、さらには全国英語教育学会(2015年8月)にも参加して自己研鑽を怠らないように心掛けた。

4-2. 授業アンケートの活用

最新の理論や教授法を実際に授業で実践した場合、最初からそれが成功するとは限らない。教員は、受け持つ学生やクラスの習熟度に合わせてその手法を常に改善していくことが求められる。そのために、学期終了頃には可能な限り授業独自のアンケートを実施することになっている。eラーニングを導入している授業ではウェブ上で、そうでない場合は紙ベースで行う。2015年度は前期2クラスの「英語C」及び「英語D」はウェブ上で、後期2クラスの「英語B」では紙ベースで授業アンケートを実施した。そのアンケート結果の一部は上記5「学習成果」のエビデンスとして提示している。(参考資料5)

4-3. 教育実践の振り返りと論文の執筆

私が授業で取り入れた授業実践に関しては、定期的に統計分析やアンケート集計を行い、その新たな実践を振り返り、教育論文もしくは著書の形で発表することになっている。以下は、その一例である。

■英語教育に関する著書：

- ✓ 「e-learning 副教材案における TOEIC への影響 (第3章 3.3)」； 2012年03月、発表情報；『e-learning と TOEIC を活用した英語教育—教員養成の立場から—』(愛知教育大学外国語教育講座)、63-69、著者； 田口 達也、小塚 良孝、江口 誠、井上 真紀
- ✓ 「文学教材の活用方法—短編小説を用いたリーディングの指導—」； 2013年03月、発表情報；『コミュニケーション能力を育む小中高の英語教育』(愛知教育大学外国語教育講座)、39-44、著者； 江口 誠
- ✓ 「e-learning 教材を用いた英語教育の実践報告 (第二部第4章)」； 2013年03月、発表情報；『英語力向上に向けた愛知教育大学の挑戦：質保証と学習自律向上を目指して』(愛知教育

大学外国語教育講座)、 34-46、著者; 江口 誠

■英語教育に関する論文:

- ✓ 「英語教育における文学教材の活用」; 2013年03月、発表情報; 愛知教育大学『研究報告』人文・社会科学編、62、77-84、著者; 江口 誠
- ✓ 「Web 学習システムを活用した英語教育の実践と課題」; 2015年03月、発表情報; 『佐賀大学全学教育機構紀要』、3、69-86、著者; 江口 誠
- ✓ 「Web 学習システムを活用した英語教育の実践と課題(2)」; 2016年03月(出版予定)、発表情報; 『佐賀大学全学教育機構紀要』、4、著者; 江口 誠

(添付資料6-1, 6-2, 6-3)

上記以外にも、大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」英語WG(主幹校:佐賀大学)に参画し、佐賀大学プロジェクト研究所「ICT革命と大学教育研究所」へ参加するなど、学内外の教員や教育機関との連携による多面的な教育改善を目指している。

5. 教育の成果・評価

本学の語学の授業では、例えば授業の第1週目と第15週目などで学生の英語力を測るテストを行っていないため、客観的なデータ等を提示することは困難である。さらに、1学年次と2学年次の英語の授業時間は異なり、同じ学年であっても原則として前期と後期では担当教員を変えることにしているため、学生は毎学期異なる英語教員の授業を受けることになり、各担当教員の教育成果を計る術はない。しかしながら、私の授業を受けた学生が回答した全学的な授業アンケートがあるため、参考までに該当する箇所を以下に示す。

5-1. 授業時間外学習時間について

■質問: 授業時間外学習(予習や復習、授業時間後に行ったレポート作成など)は、1回の授業ごとにどの程度しましたか。

- 回答: 1. 全くしていない 2. 1時間未満 3. 1時間程度
4. 2時間程度 5. 3時間以上

授業	平均	学部平均	全体平均
2015年度前期「英語C」(1)	3.0	2.5	2.8
2015年度前期「英語C」(2)	3.5		

以上の事から、学生は学部別平均や全体平均を上回り、平均して少なくとも毎週1~1.5時間の授業時間外学習を行っていることが窺える。

5-2. eラーニング、学習の習慣化について

■質問：教材（教科書、配布資料）や ICT 環境（LiveCampus、講義配信システム、各授業の講義用 Web ページ、ネット授業、eラーニングなど）は授業の理解に役立ちましたか

■回答 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない
4. そう思う 5. 全くその通りだと思う

授業	平均	学部平均	全体平均
2015 年度前期「英語 C」(1)	4.4	3.8	3.9
2015 年度前期「英語 C」(2)	4.5		

対象となる授業では課題のほとんどを Moodle 上で出していたが、いずれのクラスにおいても学生は好意的に受け取っていることが窺える。

また、Moodle 上で実施した 2015 年度前期「英語 C」(2 クラス) の eラーニングアンケートから、関係する項目を以下に抜粋する。

質問項目	好意群
語彙の復習ができた	97%
意味が理解できる単語が多くなった	84%
eラーニングは英語力をつけるのに役立つ	81%
集中して勉強できた	71%
学習習慣をつけることは大切だと思った	97%

いずれの項目においても好意群の比率は高く、少なくとも「英語 C」で実施した eラーニングに関して言えば、学生は学習の意義を見いだしていることが窺える。

さらに 2015 年度後期「英語 B」(2 クラス) において、eラーニングに関するアンケート調査を行ったところ、五段階評価で満足度は 3.3 及び 3.5 という結果が得られた。習熟度別で英語力が相対的に高くないクラスであることを考慮すると、いずれも比較的高い満足度であると考えられる。また、eラーニングの良かった点として、以下のような肯定的な意見が得られた（一部抜粋、数値は重複した回答の数）。

- ✓ （授業で習った内容に沿った）復習ができた(16)
- ✓ 難易度がちょうどよかった(6)
- ✓ 最後のゲームもリフレッシュになった・楽しく学べた(5)
- ✓ 自宅などのパソコンで学習が出来た(4)
- ✓ ユニットごとに要点・文法・重要事項を幅広く学ぶことができた(4)
- ✓ 何度でも挑戦できた・やり直せた(3)
- ✓ 色々な問題形式やゲームで英語の予習復習ができた(3)
- ✓ 簡単で分かりやすい操作だったので楽しくできた(3)

この授業では試験的にテキストに準拠した eラーニング教材を使用した。以上の結果から、復習教材として優れており、満足度も比較的高いことが窺える。また、Moodle 上で教員が作成するコンテンツとは異なり、学習を促すための様々な手法が取り入れられていることも学習を促すという点

で効果があったと思われる。

5-3. 意見を発表する機会について

■質問：この授業では、必要に応じて学生に発言を促すことや、グループワークやディスカッションを実施する等、授業内容について学生自身が考えることを促すための配慮がありましたか。

■回答 1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない
4. そう思う 5. 全くその通りだと思う

授業	平均	学部平均	全体平均
2015 年度前期「英語 C」(1)	4.3	3.9	3.9
2015 年度前期「英語 C」(2)	4.3		
2015 年度前期「欧米の文化・文学」	4.6		

上記 3-3 の授業方法の一つとして、「様々な価値観や文化の存在を認識させ、それらに対する自分自身の意見を（英語で）表現出来る人材を育成する」ことを提示しているが、アウトプットのレベルや中身は別としても、少なくとも学生は自分自身の意見を英語もしくは日本語で考え、発表するような授業であったと認識していたことが窺える。

6. 今後の目標

6-1. 語学としての英語の授業に関して：「英語 A」、「英語 B」、「英語 C」、「英語 D」

■短期的な目標：

ここ数年、限られたクラスで e ラーニング課題を導入してきたが、2016 年度以降は原則として全ての授業で取り入れる。その際、使用するテキストとの親和性及び教育効果の観点から、主にテキスト準拠型の既製コンテンツを利用するが、e ラーニング教材が準備されていない教材を選択した場合は、Moodle で教員が独自にコンテンツを作成する。その際、社会の多様な価値観や文化に触れることが出来るような教材を可能な限り選択する。また、自分の意見を英語で表現するようなタスクやプロセスライティングを多く取り入れることにより、消極的な学生にも授業参加を促す。

上記に加えて、学期の最初と最後に簡単な試験を行い、学生の英語力の伸びを計測したい。4-3 で言及した大学間連携共同教育推進事業の成果の一環として、2016 年度の「英語 A」の授業で e ラーニングを活用した試験を全学年で実施する予定である。その取り組みを利用して、「英語 A」の終了時（第 15 週）に同内容の試験を課すことを計画している。

■長期的な目標：

e ラーニングによる課外学習には、英語力が低い学生には余り適していないというデメリットも存在する。そもそもそのような学生は英語学習に対して積極的に取り組む意欲が低いためである。しかしながら、ボトムアップを図ることは一朝一夕に成し遂げられるような容易なことではない。

そこで長期的な目標としては、動機付けという観点から、そのような学生でも課外学習に意欲的に取り組めるよう、例えばユビキタス学習を充実するなど、気軽に課題学習が可能となる環境整備を行う必要があると感じている。また、LET（外国語教育メディア学会）以外にも可能な限り英語教育関係の学会に参加し、最新の知見、理論、研究などを吸収し、5年以内には研究発表が行える程度の分析能力を身につける必要があると思っている。さらに、eラーニング学習を導入する場合は、コンテンツの作成自体が目的化されてしまい、得てして自己満足に陥るものである。従って、学生の利益という観点を忘れないようにしなければならない。

6-2. イギリス文学・文化の授業に関して：「欧米の文化・文学」、「異文化理解演習Ⅰ」（2016年度以降）、「英米文学演習Ⅱ」（2018年度以降）

■短期的な目標：

英語を専門としない学生に対して行う一般教養としてのイギリス文化・文学に関する授業では、全ての学生が能動的に授業に参加出来るように、グループディスカッションや小レポート課題を設定すると共に、ビデオやパワーポイントなどの視覚教材を多用して講義が単調にならないように工夫したい。また、毎年度使用する教材やテーマを最新かつ最適なものに変更する必要もある。それによって、学生の異文化への関心をさらに高めることが出来るからである。

■長期的な目標：

一般教養としてのイギリス文化・文学に関する授業では、現在は数回程度の提出を義務づけている小レポートの回数を段階的に増やし、学生の授業参加をさらに促すようにしたいと思っている。さらには大学の自学自習支援システムを活用し、Moodle上で課題を設定したり、視覚教材が提供出来るようにしたりしたいと考えている。

2016年度以降に担当する英語を専門とする学生に対する授業は、佐賀大学ではまだ一度も担当したことがない授業科目であるため、長期的な視点から試行錯誤を繰り返しながら授業改善を行う必要があると認識している。まずは、文学作品を原文で読むことで、読解力の向上を図ると共に、作品のテーマや正答のない質問に対して自分の意見を表現することが出来るように指導したい。また、英語を読む楽しさや異文化を理解する、もしくは理解しようとする態度を育成したい。さらにそれらはいずれも英語の教員免許状を取得するために必要な授業であるため、学生が中学校や高校の授業で文学教材を気軽に取り入れることが出来るように、教材としての利用方法の教授も行う必要があると考えている。

7. 添付資料・参考資料

1. 授業科目一覧
2. 使用教材の例
3. シャドーイング活動用シート
4. 英作文課題の例
5. 授業アンケートの例
6. 教育論文の例